山水と風景――遠近表現の東西

2024年6月27日(木)－9月29日(日)　会場：常設展示室

※月曜休館 ただし、7月15日(月・祝)、8月12日(月・休)、9月16日(月・祝)、9月23日(月・休)は開館。7月16日(火)、9月17日(火)、9月24日(火)は休館。
※開館時間 9:30－17:00 ただし8月10日(土)、11日(日・祝)、12日(月・休)、13日(火)は19:00まで開館。
※学芸員によるギャラリートーク 7月6日(土)、7月20日(土)、8月18日(日)
　ふくふくおはなし美術館(対話型鑑賞会)：7月28日(日)、8月11日(日・祝)　いずれも14:00より

「風景画」と言えば、誰しも山や海、河川といった自然美を描いた絵画を思い浮かべるのではないでしょうか。現代の日本人が最初に出会う風景画とは、教科書で見かけたセザンヌやゴッホらによる西洋絵画であることが多く、しかもこれらは19世紀後半以降の作品です。明治維新後、欧米化の波が強く押し寄せてきて、美術の世界で紹介されるのは専ら西洋絵画となり、日本古来の絵画はあまり顧みられない時期がありました。しかし浮世絵や工芸品など海外から人気の高いジャンルもあり、それにこたえるため美術工芸学校が開設され[1]美術教育が盛んになりました。また戦前戦後、日本の中世・近世の古美術品を好んで収集した欧米の美術館やコレクターに高く評価された作品群が、逆輸入の形で紹介されるなどしたこともあって、日本美術の優れた点が改めて見直されていきました。

中国では、9世紀には既に山水図が成立していたと言われます。五代から北宋時代にかけて、華北では荊浩(けいこう)・関仝(かんどう)、江南では董源(とうげん)・巨然(きょねん)という重要な画人が登場し、東洋美術史に名を刻んでいます。一方西洋においては、「Landscape（風景)」という言葉そのものは16世紀にようやく現れ[2]、風景が独立したテーマとして確立されるようになるのは17世紀のオランダからでした。西洋より中国において、かなり早くから盛んに描かれたものの、自然に対するとらえ方は、東西で大きく異なりました。ここではまず中国から継続的に影響を受けてきた日本の美術について見ていきましょう。

日本が古来、中国大陸からの影響を受けてきた例をいくつか挙げてみます。奈良時代に仏教の経典とともに入ってきた中国の漢字をもとに、平安時代には仮名文字が作られました。次に鎌倉時代、栄西によって禅宗とともにもたらされた茶は、室町から桃山にかけて「茶の湯」文化として、我国独自のものとなりました。江戸時代には黄檗宗とともに入ってきた煎茶が新たな「漢」の存在となり、文人趣味と合わさってもてはやされるようになりました。憧れの中国から伝わった当時は、新鮮な感動や愛着などあった漢の要素が、すっかり和の中に定着して、漢と意識していないものすらたくさんあるはずです。絵画のジャンルにおいても、同様のことが起こります。中国絵画は「唐絵」「漢画」と呼ばれ、それに対し日本の絵画は「やまと絵」と呼ばれてきました。漢の要素をやまと絵に溶け込ませていったものも、後に新たな漢の文化が入れば、やまと絵となっていきます。

このような中、鎌倉から室町時代にかけては、禅宗とともに入ってきた水墨山水画が重要な位置を占めます。禅僧たちが将軍や有力な武家によって集められ、禅宗サロンにて書画や唐物が飾られました。南宋時代の馬遠(ばえん)や夏珪(かけい)など、院体画とも呼ばれる中国絵画が特に人気が高く、足利将軍のコレクション「東山御物(ごもつ)」にも含まれます。大自然の全容ではなく、一角を切りぬいたような「辺角の景」と呼ばれる画面構成が特徴です。

室町時代の雪舟等楊の師である周文も、水墨山水画を描いています。この頃は画人が画面の下方に水墨画を描き、その上方に高僧が画賛を書くという「詩画軸」が多く作られました。画僧の地位がそれほど高くなかった時代に、雪舟は水墨画の本場である明で李在らに学び、独自の水墨画の世界を作り上げました。雪舟の画風はのちの狩野派や雲谷派、長谷川派などに大きな影響を与えています。

本展では第1章で、日本の山水画の源流となった中国の山水表現の特徴に注目しながら、その根幹にある文人画の考え方について

No.13　吉田博 《阿武兎の朝》 1930年

No.11　吉田博 《鞆之港》 1930年

No.16　王鑑
《倣燕文貴山水図》

No.21　銭厓
《山水図》 1929年

No.29　十時梅厓
《山水図》 1801年

No.24　橋本関雪
《夏山観瀑》

No.43　大村廣陽 《鞆浦》 1936年

も読み解いていきます。続く第2章では、「漢」をベースに日本独自の「和」に取り込んでいった、したたかな日本の山水画を見ていきます。第3章では幕末から明治維新の後、西洋文化から大きな影響を受けた近現代日本の風景画を、西洋絵画とともに紹介します。

第１章・中国の山水表現

中国において水墨山水図は、五代から北宋、南宋、元、明、清と長く続きます。華北地方の峨々とした峻厳な山並みを描いたものは北宗画、江南地方の緩やかな山や河を描いたものは南宗画と呼ばれていました。次第に北宗画は職業画家、南宗画は文人によるものと定義づけられていきます。そして明末の董其昌は、画派の流れを整理したうえで、南宗画の優位を唱えました。元末四大家とは、黄公望（こうこうぼう）、呉鎮（ごちん）、倪瓚（げいさん）、王蒙（おうもう）の4人で、明代呉派の文人画家たちをはじめ、後世に大きな影響を与えました。文人画とは、士大夫（高級官僚・知識人）による余技的な絵画のことで、画を売る職業画家たちより、自分たちの画がすぐれていると考えます。文人画における山水図は、実際の風景をそのまま描くのではなく、俗世を離れた理想の世界、崇高なる精神世界をあらわします。

第1章では明末から清代の作家による山水画を中心にご紹介します。ここに登場する王時敏と王鑑、王翬（き）は、「四王呉惲」または「清初の六大画家」と呼ばれた6人の画家のうちの3人です。王時敏と王鑑は元末四大家の黄公望に憧れ、その画法を学んでいました。

王時敏と王鑑は、王鑑のほうが6歳若いのですが「二王」とも言われるほど仲がよく、続く王翬は2人に比べ30歳以上年下になります。まず王鑑が王翬の才能に気付き、王時敏が家に招いて画の指導をし、二王の指導は20年にも及びました。王翬は古人の作品を多く臨摸するなどして学び、南北２宗を合一したということで、高い評価を受けています。

王時敏《山水図》（No.15）の画面右上には「丙戌仲春仿曹雲西筆法　王時敏」と落款があり、制作年は1646（順治3）年の春、元代・曹雲西の筆法を真似て描いたということがわかります。文人画の多くはこのように落款を読むことで制作時の様子を想像することができ、鑑賞の楽しみの一つとなります。王鑑《倣燕文貴（えんぶんき）山水図》（No.16）には、「倣燕文貴筆意於寒碧山荘　湘碧王鑑」と落款があり、王時敏と同様、先人である北宋時代・燕文貴の筆法を学んで描いたと記しています。6世紀の謝赫が唱えた「画の六法」のうちの一つである「伝移模写」つまり、先人の筆意を真似て学ぶことが重要だと論じられてきました。本図は屹立する山々は繊細かつ柔らかいタッチで丁寧に描き込まれ、樹木の葉の集合が点描で緻密に表されているなど細部まで入念に描かれていて、燕文貴の筆法に通じる特徴を見ることができます。

王翬《山水図》（No.17）の画面右上には、友人・江上外史と作者王翬の二人が蘇州の虎丘で遊び、夜遅くまで詩画について語り合ったと記されており、二人の交流が偲ばれます。文人たちにとって友人たちとの心の交流は、特に大切なものでした。山水画の多くは、点景人物と呼ばれる小さな人物が描かれており、友人を訪ねて橋を渡る人、琴棋書画を楽しむ人など、文人たちの楽しみが伝わります。

中国の山水画における遠近表現に注目してみましょう。北宋時代の郭熙（かくき）は、画論『林泉高致』で「三遠」を説きます。三遠とは、麓から山頂を見上げる「高遠」、山の手前から山の背後をのぞき見る「深遠」、近山から遠山を望む「平遠」の三法を一つの画面に融合させ構成するものです。視線が移動するため、西洋の透視図法に慣れた目には馴染みにくい遠近法ですが、高さ広さ深さを一つの画面に同時にかつ多角的に構成した東洋の山水画独特の遠近法です。この三遠に、さらに韓拙が別種の三遠を追加して「六遠」を唱えるなど、山水画は長く重要な位置を占めてきました。しかし清代には「揚州八怪」らが次々と新しい表現に取り組み、既成の画風に倣うことはせず、また花卉図の人気が高まってきたこともあり、山水図は行き詰まりを見せるようになりました。

第2章・日本の山水表現

江戸時代には、1639（寛永16）年の鎖国以来外国、もちろん中国へも渡航が許されず、中国とのやり取りは専ら長崎を通してのみとなりました。憧れの国中国の画を学ぶために、長崎から入ってくる画譜はもちろん、マイナーな作家の作品であっても競って入手しました。祇園南海は初期文人画家のひとりで、『八種画譜』や『芥子園画伝』などから中国文人画の筆法を学び、先駆的役割を果たしました。

本章では日本の文人画家として与謝蕪村、岡田米山人、岡田半江、十時梅厓らの作品を展示します。蕪村は「菜の花や月は東に日は西に」の句など、よく知られた俳人ですが、江戸時代当時は画家としての方が有名でした。祇園南海や柳沢淇園らに続き、池大雅とともに、蕪村は文人画の大成者とされ高く評価されています。岡田米山人・半江父子は、

大坂で活動した文人画家で、米山人は米屋を営み、米臼をひきながら読書し、書画を嗜んだと言います。中国文人画を独学し、のちに画業が評判になると、当時の文人達と交流を深めました。骨太の思い切りのよい線描が特徴で、彼の持ち味となっています。彼の居宅「正帆」には、田能村竹田・頼山陽・浦上玉堂・春琴・篠崎小竹などが集まり、文人のサロンとなっていたようです[3]。また子の半江は若い頃父に画を学び、その影響が強く出ますが、南宋・元・明の絵画を研究し、中年以降は独自の穏やかな画風を形成していきました。父子仲が良く、合作をしたり、半江の画に米山人が着賛したりしています。

続いて今回展示する明治以降の画人と作品について、一部紹介します。羽田桂舟《山水佳趣四題》(No.37) は、正方形に近い画面4図に、春夏秋冬のそれぞれの場面を1図ずつ描いています。日本人は、四季折々の自然や美に対する感覚が鋭く、四季山水図や四季花鳥図など、4幅対の掛幅や春秋図・秋冬図セットの1双屏風などを多数制作してきました。桂舟の1図目の春景は、山桜の咲く山並や、雪解け水が手前の大川に流れていく様子を描いています。2図の夏景は、柳の葉が垂れ下がる木の下で、水辺に小舟を留めて、釣りをする人物が描かれます。秋景は川に架かった橋を、稲穂の束を担いだ農夫が歩いて渡る場面です。冬景は深い雪に埋もれたような民家が静かに立ち並んでいます。4図とも人物は小さく描かれ、まわりの風景には広くゆったりした空間がとられており、水墨の濃淡を生かし色彩は抑えながらも生活する人々の温もりが感じられます。

道元禅師が日本の四季を「春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえてすずしかりけり」と詠んだ有名な和歌があります。四季折々の風物や雪月花など、日本人はさまざまな趣を題材にして、詩歌を詠んだり書画に認めてきました。四季や朝夕の時間のうつろいを敏感に感じとり、作品に表現してきた日本人の繊細な感性と美意識を感じながら、ご覧いただけると思います。

No.33　藤井松林　《蓬莱仙境図》　1893年

秋　春　冬　夏

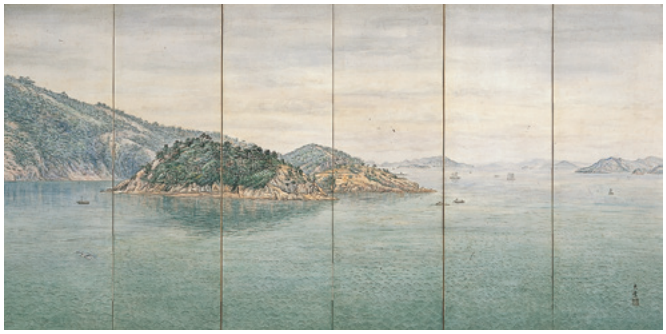
No.37　羽田桂舟　《山水佳趣四題》　1920年頃

第3章・近現代日本の風景画と新収蔵品紹介

明治維新後、欧化政策の強力な波が押し寄せてきたものの、しばらくの間、日本で描かれたのは「風景画」ではなく「山水画」であったようです。1870年に工部美術学校が開校し、イタリア人のお抱え教師フォンタネージらから、浅井忠や小山正太郎らは風景画の指導を受けるものの、わずか10年余りの1882年に同校は閉校となりました。しかし明治美術会や白馬会などで風景画が次々と発表されるようになり、西洋に留学する画学生も増えていきます。鹿子木孟郎は小山に学んだ後、1900年に米国経由で渡欧します。パリのアカデミー・ジュリアンでJ・P・ローランスに学び、本格的な油彩画技法を身に付けました。1906年、1916年にも渡欧しており、《フランス風景》(No.49) は、3回目の渡欧の際の作品と考えられます。本作は暖かみのある色彩で、市街地の様子が情趣豊かに描かれています。

西洋の風景画における遠近法と言えば、視点を固定した線遠近法である「透視図法」をまずは思い浮かべることでしょう。岸田劉生《晩春の草道》(No.51) の、画面中央の一本の道が一つの消失点に向かって狭まっていく様子が描かれており、一点透視図法のわかりやすい例となっています。また「空気遠近法」の例として、吉田博《阿武兎の朝》(No.13) を見ると、手前の船はコントラストを強く鮮明に、遠景の山は淡くうっすらと描かれていることで、しっかりとした奥行を感じとることができます。また、寒色より暖色が手前に見えることを利用した「色彩

No.40　大島祥丘　《溪山帰樵図》　1981年



No.48　青木大乗　《鞆　仙酔島》　1935年

No.49　鹿子木孟郎 《フランス風景》 1917年頃

No.51　岸田劉生 《晩春の草道》 1918年

No.2　佐々田憲一郎 《鞆港》 1950年

No.55　新延輝雄 《アビニヨン休日》 1984年

No.57　片山公一 《尾道水道》 1951年

遠近法」や、物に光が当たってできる影から生まれる立体感による「陰影法」の利用など、西洋の風景画においては、科学的な遠近法によって空間の奥行を再現してきました。

しかし遠近法ばかりでなく、あえて平面的に表現しているものや荒々しいタッチを生かした作品など、風景表現は多様です。作家の個性や作風の面白さに気づいたり、それぞれの作品の魅力を発見したりできると思います。

新たに寄贈された片山公一《尾道水道》(No.57)、宇田要之助《セーヌ河曳舟》(No.60) も紹介します。今回初公開となるこの2点を、既に収蔵されている作品とともに展示していますので、作風を比較しながら見ると興味深く感じていただけると思います。

本展では「山水・風景」をテーマとし、主に伝統的な日本絵画における山水画を中心に紹介してきました。その導入として、最初のコーナーに「夏」をテーマとした一区画を設けています。暑い夏を過ごす中で、せめて美術作品を見ることで涼しい気分になっていただけるよう、この季節にふさわしい水辺を描いた作品を紹介します。鞆の浦、阿伏兎、白石島といった備後の風景を題材にした作品もあります。清流や滝、海といった水辺の風景をながめて少しでも涼しい気分を味わっていただければ幸いです。

また、茶道具を含む工芸品も展示しています。お茶碗の釉薬のかかり具合などを「景色（けしき）」と呼び、偶然できた模様を景色になぞらえ、地名や風物を銘にした作品があります。また自然の景物を単純化し、文様として加飾した作品にも味わい深いものがあります。日本人の風流を愛する心、想像力の豊かさに注目していただければと思います。

（学芸員　中村麻里子）

註

1　1876年、日本で最初の公立美術学校である工部美術学校が創設され、1880年京都府画学校（現・京都市立芸術大学）、1887年東京美術学校（現・東京藝術大学）が開設された。東京美術学校は当初、日本画と木彫、彫金、漆工の4科であったが、1896年にようやく西洋画科と図案科が設置された。

2　参考文献1. p18

3　村上敬「正帆とはなにか」「岡田米山人と半江」展覧会図録　三重県立美術館　2022年

【参考文献】

1. 「東西の風景画」展覧会図録　静岡県立美術館　1986年
2. 青木茂『岩波近代日本の美術８　自然をうつす　東の山水画・西の風景画・水彩画』岩波書店　1996年
3. 王伯敏『中国絵画史事典』雄仙閣　1996年
4. 渡邊明義『水墨画の鑑賞基礎知識』至文堂　1997年
5. 『世界美術大全集　東洋編　第8巻　明』『第9巻　清』小学館　1998-99年
6. 内藤湖南『支那絵画史』筑摩書房　2002年
7. ふくやま書道美術館所蔵品目録Ⅰ「中国の書画と文房至宝－栗原コレクションより」ふくやま書道美術館　2004年
8. ふくやま書道美術館所蔵品目録Ⅳ「明清の書と絵画」ふくやま書道美術館　2005年
9. ふくやま書道美術館所蔵品目録Ⅶ「日本の書画Ⅱ　幕末から現代－栗原コレクション－」ふくやま書道美術館　2007年
10. ふくやま書道美術館所蔵品目録Ⅷ「中国の書と絵画－栗原コレクション－」ふくやま書道美術館　2007年
11. 松岡正剛『山水思想　負の想像力』筑摩書房　2008年
12. 島尾新『和漢のさかいをまぎらかす　茶の湯の理念と日本文化』淡交社　2013年
13. 宇佐美文理『中国絵画入門』岩波新書　2014年

ふくやま美術館所蔵品展示目録　No.167

発行日／2024年6月27日　編集・発行／ふくやま美術館（広島県福山市西町2-4-3）　印刷／株式会社中野コロタイプ